

荒尾教会教師 佐藤真史

人口5万1千人で4万人台に突入するのが間近に迫っている熊本県荒尾市に、教会は立っている。元炭鉱町であり、教会の歴史もその影響を受けつつ、近年は礼拝出席約10名で歩んできた。コロナ禍で家庭礼拝に切り替え、対面礼拝を再開しても出席が10名に届かない時は、苦しかった。教会で分かち合われる福音が、本当に必要とされているのだろうか？私の説教や牧会は、届いていないのではないかと悶々としつつも、教会員の逞しさや祈りに支えられて、何とか歩むことが出来ている。

荒尾教会の教師は付属園の園長・理事長を兼務することで、謝儀をいただく。2015年から幼稚園を幼保連携型認定こども園に移行し、園舎も新築した。一時は30数名だった園児数も、いまは約60名で推移している。その内、幼稚園型園児は10名で保育園型園児は50名。つまり、幼稚園のままだったら立ち行かなくなっていたのだ。けれども、共働き世帯増加による待機児童は解消しつつあり、「需要と供給」が逆転する時が差し迫ってきている。このような荒波の中で、キリスト教保育の質を高め、子どもたちと神さまの愛を分かち合っていくために、先生たちと日々奮闘している。また私自身は、同法人の他園舎建て替えの計画も始まり責任を担う中で、いま休みがほぼ取れていない。

「対談」で、戒能が指摘している各教会が直面する「困難と危機」は、荒尾教会においてはこのような形として現れている。おそらく付帯施設のある小さな地方教会と、共通する部分も多いのではないだろうか。

「教師論」を読んだが、教師試験の模範解答のようにしか受け取れなかった。つまり、「教師とはかくあるべし」と、答えを示そうとしているのだと。その意味では、「上から網を掛けようとしている」という原の指摘は的を射ている。

私が荒尾教会教師として必要としている「教師論」は、一つの「答え」ではなく、直面する「困難」に立ち向かっていく「支え」だと思う。もちろん一々個別の状況に応える「万能な教師論」は存在するはずがない。それでも諦めずに、この「困難と危機」で各教師がどのように歩んでいるのかを分かち合いたい。「こんなことを言ったら不利益を被るのでは」などという「恐れ」を抱かない場を設け、自由にこれからの教師論について議論していきたい。その場や出会いこそが、人ではなく、「神を畏れて」(申10:12)歩んでいく支えになっていくと信じている。